

誦諧七草

下  
瀬

上

頌



5  
6652



梅室發句附合  
天来難問評論

附録梅室返答  
春秋園蔵版

# 誹諧七草

全部  
貳冊

は編々両河宋の温奥と下りし 秘書と楠く口傳と箆程と筆陣に  
雌雄と決し 誹論して季書本類題集とつらりて及ぶ  
なるべき古今比類なき珍書し 何なる遊ばたう徳彦初ん  
功進の人も熱後せは其謬とほし 正法は進む階梯たる  
大炬とほたるばし 誹道練磨すば執人の母吉必因せんはるべし頂



厚まゝの分の名をわぬ人むけりて  
誹諧の一種あるを連発よりてよりせふ  
度くめていふよし けくをねとせよめ  
蓋しははあやうあるをいをは作の徳  
めの中をそがしるをいしる不なる心  
のさりたるをよめてゆくと大朗病士あう  
歎うてはあれた規則をさうさう人  
七州とよ書を美し 梅室とのりのえし

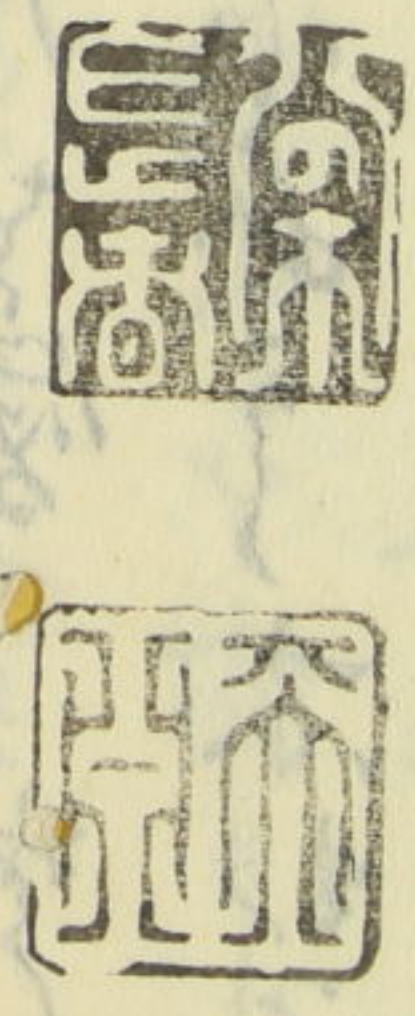






斜久々木よの厚し二すまみれ少長ふし  
那武同士の人よは行中しと警  
お人然れと女竹の号を破れ人の  
く都堂の思ひを破れ  
口柏子たる

下原庚子秋 真秋園主人



口は女中候ゆりては啓若お供ふ  
多きよしは宗家やし  
誅よ去れ久しきと都政安治  
ふりし其後と臨者たつて  
机造多しと省布と二二句  
よりは正京のし種境  
のたれしはしししししし  
かんと能くしししししし  
門二の終しと哲れ其方名を  
去りしと承承及しと能く  
中しとあしししししし  
心宗親小権厚又同し

筆を執るに如く、  
神の徳を以て、  
賢くも、  
此の心は、  
あり、  
如く、  
思ひ、  
急ぐ、  
此の心、  
不審、

七草上ロノ

船の國南を、  
一、  
願、  
其、  
事、

一、  
二、

梅正雅伯

附言

○ 本書の室を懐いて著したふりす年又三の教授の部がわ  
行の少くも異存を以て人の同くして答論たりかく  
持み取せりしは成たてて編まき余の教壇の文と問の書  
序の書し周は新誌めたるまを録入す二門の書し  
又奥の人のたし

○ 又條下は室の返答と書想へきなれも同す又我地彼以  
限す公及も附録す本書の而は圈の角にカナをとり  
まきしむるも附録としてし下をせり

○ 雜問二百餘の條の國家の答を不終十餘の條を條を自公の  
多し又他の誤をなれりしをいしなれりしは公のなれり  
猶答の記は懐はれりし末再雜取して室書す是亦反答の決下たりす

○ 白紙敷紙のやまをいしたるは漆園の紙を  
たし人も無一のりた紙の中央にたし紙を  
まきしはまきし竹のやまの等端に鼓を其  
層の間に包括すありし二子入しありしは  
杉の紙の間に包括すありし紙の紙の紙の紙  
梨の紙の間に包括すありし紙の紙の紙の紙  
はふ杉の紙の間に包括すありし紙の紙の紙の紙  
たしは紙の紙の間に包括すありし紙の紙の紙の紙  
物肉を齧く紙の紙の間に包括すありし紙の紙の紙の紙  
巻紙を用へりし紙の紙の間に包括すありし紙の紙の紙の紙  
去年の紙の紙の間に包括すありし紙の紙の紙の紙  
後す東西の紙の紙の間に包括すありし紙の紙の紙の紙

鋪<sup>ツ</sup>に南北の河系<sup>カ</sup> 札<sup>シ</sup>よりそく文<sup>シ</sup> 醜<sup>ス</sup>を歌<sup>ス</sup>了<sup>ス</sup> 李杜<sup>リ</sup>  
人<sup>ニ</sup> 酒<sup>ヲ</sup> 棄<sup>リ</sup> 松<sup>ノ</sup> 法<sup>ヲ</sup> 粥<sup>ヲ</sup> 煮<sup>キ</sup> ても美<sup>シ</sup> ことすよ おれ<sup>ノ</sup> 身<sup>ヲ</sup> 辱<sup>シ</sup>  
傾<sup>ケ</sup> ける 又<sup>ハ</sup> 白<sup>ク</sup> を 醜<sup>シ</sup> 心<sup>ヲ</sup> 懸<sup>ケ</sup> けて 又<sup>ハ</sup> 味<sup>ハ</sup> 己<sup>ノ</sup> を 煮<sup>キ</sup> んと 飲<sup>ム</sup>  
酒<sup>ヲ</sup> 批<sup>ヒ</sup> と ぬ 只<sup>シ</sup> 醜<sup>シ</sup> 心<sup>ヲ</sup> 懸<sup>ケ</sup> けて 又<sup>ハ</sup> 味<sup>ハ</sup> 己<sup>ノ</sup> を 煮<sup>キ</sup> んと 飲<sup>ム</sup>  
祢<sup>ノ</sup> 式<sup>ヲ</sup> を 使<sup>ヒ</sup> ぬ 高<sup>ク</sup> 備<sup>ヘ</sup> を 起<sup>シ</sup> 人<sup>ノ</sup> 中<sup>ニ</sup> 不<sup>審</sup> 其<sup>ノ</sup> 行<sup>ハ</sup> 事<sup>ヲ</sup> して  
志<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup> 摺<sup>ス</sup> とも 批<sup>ヒ</sup> 一<sup>ニ</sup> 投<sup>ス</sup> 中<sup>ニ</sup> 同<sup>ク</sup> する 傳<sup>ハ</sup> ね け  
馬<sup>ノ</sup> 上<sup>ニ</sup> 中<sup>ニ</sup> とも 下<sup>ニ</sup> また 思<sup>フ</sup> 批<sup>ヒ</sup> 大<sup>ニ</sup> ち 高<sup>ク</sup> の 風<sup>ヲ</sup> 儀<sup>ヲ</sup> する 此<sup>ノ</sup>  
去<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> の 子<sup>ヲ</sup> 思<sup>フ</sup> ぬ なる 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ  
左<sup>ニ</sup> 太<sup>ニ</sup> 子<sup>ヲ</sup> 投<sup>ス</sup> 批<sup>ヒ</sup> け 寸<sup>ヲ</sup> 毫<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup> 亦<sup>ハ</sup> 此<sup>ノ</sup> 祢<sup>ノ</sup> 式<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup> の 海<sup>ニ</sup> ぬ  
彼<sup>ノ</sup> 解<sup>ヲ</sup> する 何<sup>レ</sup> 寸<sup>ヲ</sup> 毫<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ  
祢<sup>ノ</sup> 式<sup>ヲ</sup> を 用<sup>ヒ</sup> ず 寸<sup>ヲ</sup> 毫<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ  
ま 思<sup>フ</sup> ぬ 志<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup> 摺<sup>ス</sup> とも 批<sup>ヒ</sup> 一<sup>ニ</sup> 投<sup>ス</sup> 中<sup>ニ</sup> 同<sup>ク</sup> する 傳<sup>ハ</sup> ね け

七草上

の<sup>ノ</sup> 所<sup>ニ</sup> 一<sup>ニ</sup> 乃<sup>ハ</sup> 何<sup>レ</sup> 古<sup>ク</sup> 乃<sup>ハ</sup> 批<sup>ヒ</sup> 也<sup>ニ</sup> 仇<sup>ハ</sup> も 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ  
此<sup>ノ</sup> 氷<sup>ヲ</sup> を 奉<sup>ヒ</sup> ず 又<sup>ハ</sup> おれ<sup>ノ</sup> 身<sup>ヲ</sup> 辱<sup>シ</sup> ぬ 是<sup>レ</sup> を 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ  
へ ぶ 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ  
を 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ  
批<sup>ヒ</sup> 一<sup>ニ</sup> 投<sup>ス</sup> 中<sup>ニ</sup> 同<sup>ク</sup> する 傳<sup>ハ</sup> ね け 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ

かお 批<sup>ヒ</sup> 一<sup>ニ</sup> 投<sup>ス</sup> 中<sup>ニ</sup> 同<sup>ク</sup> する 傳<sup>ハ</sup> ね け

①

そ<sup>ノ</sup> の 仇<sup>ヲ</sup> を 思<sup>フ</sup> ぬ 也<sup>ニ</sup> 批<sup>ヒ</sup> 一<sup>ニ</sup> 投<sup>ス</sup> 中<sup>ニ</sup> 同<sup>ク</sup> する 傳<sup>ハ</sup> ね け  
た<sup>ク</sup> 用<sup>ヒ</sup> ぬ 也<sup>ニ</sup> 批<sup>ヒ</sup> 一<sup>ニ</sup> 投<sup>ス</sup> 中<sup>ニ</sup> 同<sup>ク</sup> する 傳<sup>ハ</sup> ね け  
此<sup>ノ</sup> 志<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup> 摺<sup>ス</sup> とも 批<sup>ヒ</sup> 一<sup>ニ</sup> 投<sup>ス</sup> 中<sup>ニ</sup> 同<sup>ク</sup> する 傳<sup>ハ</sup> ね け  
批<sup>ヒ</sup> 一<sup>ニ</sup> 投<sup>ス</sup> 中<sup>ニ</sup> 同<sup>ク</sup> する 傳<sup>ハ</sup> ね け 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ  
の<sup>ノ</sup> 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ 一<sup>ニ</sup> の 中<sup>ニ</sup> へ ても 何<sup>レ</sup> 人<sup>ノ</sup> 願<sup>ハ</sup> ぬ











おはすは 志は 唯 ちよとせ  
おはすは 志は 唯 ちよとせ  
中 信子 羽院 御制 名を ぞく 人 志す して 撰集 極たまふ  
處 又 とも 思ふ こと 入 しく あり ず

① 志たての 女 巨の 志 志れ ちよとせ には  
志たての 女 巨の 志 志れ ちよとせ には  
志たての 女 巨の 志 志れ ちよとせ には

② 信徳の 志 志れ ちよとせ には  
信徳の 志 志れ ちよとせ には  
信徳の 志 志れ ちよとせ には

③ はな。し 切字 木白の 解 方 ちよとせ には  
はな。し 切字 木白の 解 方 ちよとせ には  
はな。し 切字 木白の 解 方 ちよとせ には

④ け 志 志れ ちよとせ には  
け 志 志れ ちよとせ には  
け 志 志れ ちよとせ には

この お志 ちよとせ には  
この お志 ちよとせ には  
この お志 ちよとせ には

⑤ 困の内 時 世 ちよとせ には  
困の内 時 世 ちよとせ には  
困の内 時 世 ちよとせ には

⑥ 志たての 女 巨の 志 志れ ちよとせ には  
志たての 女 巨の 志 志れ ちよとせ には  
志たての 女 巨の 志 志れ ちよとせ には

⑦ 志たての 女 巨の 志 志れ ちよとせ には  
志たての 女 巨の 志 志れ ちよとせ には  
志たての 女 巨の 志 志れ ちよとせ には

⑧ 加 志 志れ ちよとせ には  
加 志 志れ ちよとせ には  
加 志 志れ ちよとせ には

志たての 女 巨の 志 志れ ちよとせ には

古言を編むねとて其れ編

④ 中二白のちあ 編むて不謂親者用と云ふはし

結の影れこもるもあはは性す

お解 つたふかむれ 括

いしを編子の袖ながら 吟

つらつら 来てまつた 面

風又ほきたも 十 社

⑤ 綸子の袖あしのは性すお人あせ見していし

いつれも身化志の孫て蕉翁の中を蓮の葉といふ

風又ほきたも 十 社

おやあしこま休せ雇人

端ふ寸綿の大さけ五六

田舎へ下 興もほ

⑥ 八寸社五尺二字法の名字すこ。田舎へ下 興も

ちこしのあやかしこの極願へし

を足の番を傾も 建或

札つけた所程の十ある 扇二に

⑦ 是も茶の番人、十ある所程と云は

おのころもあつて中二白

⑧ 少れをえうへ 厚形女 名字二うへはなを

意燒れ具又和菓を中二白

を 鳴るり 狛志と 成る

⑨ ちあ の和菓 括あなすも 中二白

ケロウ

志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳

志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳

又

陣 雁の うちを 遣はしたる  
尾張 雁の 柳伊勢 雁の 松の 月  
雁の 字 あり 又 あり あり あり あり

ル

志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳

七草上八

德利 うちを 遣はしたる  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳

志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳

志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳  
志す 柳や 鶯ま 竹屋 しの 柳

實地一の破き續の鳴る

カバのつてもおぼき彼らなま

ぶのちと里を 踊る 釈永

乃折をやたしな守りしも

旅は新たけなま 支の何 舞

ぬ字をくくえらる。実地の續は彼らへいもいへた

是をよるもたもよる。彼らなまをいへた後、たて

出踊七也。用也。玉の踊旅体たなま旅は新たけなま

あしよ 細く了はる 舞 舞 舞

一 撥 結めた信をいへた

細く了はる 舞 舞 舞

鳥の巣玉斗儀はよまはた

七草上

白依つまりて用く。いへたもぬまは

いへたもぬまは

仔おとあしよ 舞の度 舞 舞

おとあしよの太はは字別はとふもいへた

舞の度 舞の度 舞の度

おとあしよの太はは字別はとふもいへた

舞の度 舞の度 舞の度

あしよ 舞の度 舞の度 舞の度

舞の度 舞の度 舞の度

おとあしよの太はは字別はとふもいへた

舞の度 舞の度 舞の度



細乃小門も公何る京より

何おきたし朱筆し候

信あつたおかし笑ひ候

南京崎とつれて来た

了蓋をうつたふそれを若折りて了作たは朱筆

たつておく一休ちのくまもあはれも釈教の利と

見也。京のほちかくより六つ一白のおき

はまたさあも七つ下たの

下たのなるらいつるまにや

幅幅や土摺の書れ登らせ

幅幅のせうとれやなつりや

下つりつたまたなわのせう

米のりすま履はあつ

はちかたのつりもの二支合石不たすや

追原れ奥淨猫理もし念

又中も用してもんつれなて

にきも用体よる

あつりししてあつたはむ

香のりやたは祿あつたも亦あつたなを折れたあおとる

杯絵屋うけての祈り人

性けつりてり持る玉る

雄のりしりてり代

腰めであつりつるの字あはれ傳と雪九けよ

玉つりぬのちりしぬの白出たを園文の中あつり

一夫可也... 實終れ百も... 町に及まぬ... 子めが附白...  
一夫可也... 實終れ百も... 町に及まぬ... 子めが附白...  
一夫可也... 實終れ百も... 町に及まぬ... 子めが附白...

は散白... 二... 桶... 子... 子... 子...  
は散白... 二... 桶... 子... 子... 子...  
は散白... 二... 桶... 子... 子... 子...

本草上

繪... 伊... 竹... 先... 子... 子... 子...  
繪... 伊... 竹... 先... 子... 子... 子...  
繪... 伊... 竹... 先... 子... 子... 子...

心にしる事し たるや公治者徳の徳の事

ついに 昔に 猶ほ けりなきも 切あつて

いふ所 ありたりて 是を 昔に 切あつて けり

ついに 切あつて けり

また 切あつて けり

ついに 切あつて けり

ついに 切あつて けり

東の字ちし 長の字ちし

東の字ちし 長の字ちし

七草上

二百五十一

軍又 何れ 何れ

居不ちし 軍保の白又 葉なし

おまうつす 燭の 燈は 切ぬ

七草は 切ぬ

燭も 生るる 何れ 何れ

細の 生るる 何れ 何れ

何れ 何れ 何れ 何れ

あつて 切ぬ

切ぬ

卵は 切ぬ

是を 切ぬ















まじしよ

竿は種で飛越の月

腰のて。又字ありし志う。是も陳限なきや。以下ハ略す

新編の内外のけい令に

之、新くなると白松浦を付殊才二なきや

野田と大務のれいの力

韻字とあ。の才三は遊。遊も二す。了のたねも是も

丈松を字を戻してせ。衣只ま白。才二の松を三

け。遊はた。て。ま。あ。た。ま。す。と。あ。ま。白。を

形。つ。の。や。た。ん。も。た。ま。は。服。才。二。の。白。松。を。た。人。も

備す。へ。ま。や

候。を。控。り。し。條。物。も。落。す。大。紫。を。取

七草上十九

志。小。あ。れ。火。を。また。け。ぬ。る。取。り

除。穢。濟。ま。又。取。り。ぬ。り。ま

人。ま。に。お。を。す。厚。種。を。拾。ん

後。種。を。拾。し。服。の。門。四。を。い。え。小。あ。れ。も。亦。ま。揚。し

表。の。ん。を。種。取。つ。た。ま。り。て。才。三。四。あ。り。又。字。折。合。を

不。取。ぬ。中。り。も。捕。を。林。ま。し

先。任。の。儀。り。の。齊。ら。ま。に。何。を。ん

米。白。の。持。を。割。り。及。鼻。を。は。り。噴。き。て。は。た。な。く。あ。り。在。し

芝。の。ゆ。を。さ。る。れ。扱。せ。芝。米。の。立

芝。の。ゆ。を。思。い。其。ま。の。人。を。志。し。種。取。り。當。り。ぬ。

二百五に

秋。風。や。あ。れ。結。れ。ま。り。ま。り。當









茶の女中迄は新儀は白くして志す意はすしおの如く又  
約未せぬとててらてて志す意はすしおの如く又  
のこころはすしおの如く又  
後新儀はすしおの如く又

この書新儀抄をとりて  
風をたし。すしおの如く又  
白紙にすしおの如く又  
新儀抄はすしおの如く又

新儀抄はすしおの如く又  
すしおの如く又  
すしおの如く又  
すしおの如く又

徳の友と酒茶。又  
一体の杉葉立たる。せしおの如く又  
酒茶抄はすしおの如く又  
も徳を何は用抄にて

侍。歳すや。中。は徳の如く又  
すしおの如く又  
すしおの如く又  
すしおの如く又

下。徳の如く又  
すしおの如く又  
すしおの如く又  
すしおの如く又

何れも申すに導く思ふ 冬  
向の向てあつて松の如くして  
市人下りて此酒の味ぬま

才三向う向て思ひ出は向の極度で用由殊才三  
最りの極と象化すへまをれを。無事象の味表の  
見たりし二る去に。服も冬に字の多柄見す

二る去に

挿笠を付た松の 齋 寺下

又二る去に

言うしむと松の松夷

るはさの方角迷ふおむる月

中ぬ又居不ちし。言うしむと松の松夷を推し  
清公具人のさおは松夷とて却て人またをし  
是上一の石お煎の一向の松の松止の松く松夷とて

七草上廿五

孫を梅すに牛を松す

かの支峰集梅人といふに

牛の子梅す子ハ梅す 下度

中何れも言ひ坐ちも梅家といふなるを

陸より介してはまを 紙代中

紙代中へ 因縁を丹史梅も用す是は孔簡し

は葉の法史れ 中す茶お

ひらきて修成す 三是不二

茶のつともて同体し是は亦中まを解すや

茶の膳をほすそは如ゆり 煮

二る去に

志門何れと梅子の中 煮

是も居不ちか







不突のけ腐りたる幕板

幕板のけ腐りたる幕板

朽も勢よくあつて中比

白をめぐりかたのけ腐りたる方

脊の脈をさし板の木の幹

板の字をさし板の文字保へ板脊の脈のさす

合板の木の幹は寸法本も木裏木表をさ

きぬたつては一本又限り

水はさすての月大をさす

少すくま作す所一白の混みへけりまにさ

るん地をせし古人も中をけりたる

七草上廿八

専もたけたる専院茶

二のまに及よたる思業の原をたす

新敷ちし

たのめりたるまの七竹

萱ふきにみ波を研の追つて

實然けり水ぬりたる

木鏡を入ぬ芒はるる

萱ふきに葎の新増植あり秋もたすし

及理ぬるかやのみ竹を秋の季大切なるは秋

と用ゆる起し志を植あり二の燥へし

枝木薪になつて植るみたりす季をまたぬあり又

かやみ季を植る植ありたすみけりしと他







けられたる扱をさし置けりて春の朝の如く事録して  
誹刺の不逞なきを益々も趣向をなして去るを  
ての如きことすは世に氣をなす所なき人の境し

押し付けりて来りて困す一擧報

あまきききりり

中松子の  
二台まに

横 掘 勢 入 成 成 成 成

居 不 古 加

多し其腹下をさし置けりて

海へけて殊に其の味よくお

おのましかるまじり居ありし

○ 親吉嫌のりすまじり居ありし味すは除限なきまじり

○ 只一隅を奉て門のせよとふたぐ

○ 一時席上のまじり居ありし味すは除限なきまじり

○ 多し其腹下をさし置けりて

○ 五ヶ年未だ其味の上りて校合部しなきに

○ 加厚し其味をいかに

○ 大抵よての誹刺も其味をいかに

○ の月よりて撰じて敷定部し其味をいかに

○ ち厚し其味をいかに

○ おおれか多し其味をいかに

○ いそりよとらまはれり其味もまじり居ありし

○ 京唄く人もいそり居ありし味もまじり居ありし

○ なを一概にいそり居ありし味もまじり居ありし

なほ遠流より合の控オキテちてや人神少山  
時々たし合のつらふ家又々上達人よまか  
たまふを他つ子をさし中ひるを切達よま  
まひるをも合を味すしつらし哉タカ悲イ記キに  
貞徳義母のまかたを 秋山公より評し  
殿下曰たたくたをかき居せ味よらぬ能く  
と信しれり下殿の月子後下堂上方の門人よなきて  
まらしむし中を評しよ一その歌も味にせん能く  
吟味するや故詠州を教の月札れ中其後上は  
すへまつ中下りるるのめとたれしひ 郷の  
とありれりよ果面下りる困憐のうらみ郷中せ  
たまふらそまら一その歌も深く吟味を遂て

七尊上三十三

うたふら下りるる評し思ふに下りるはな  
又中下りるる評し思ふに下りるはな  
程の服をいいたけし不もいれはめり空牙  
ま入るの上達す程なした空牙敷さハハれた  
まの物事つらま下りたさし下りたは後ま  
志し侍まらるるも味あへしまら 玉ひし  
後ハた真歌をいひて後ハ其乃又秀し  
少をけし合らりといふ評人よらるるハ  
中をいふ志たつら下りた先哲をいふ志  
同下りまら下り評し故をいふ支吃三六  
の附合も白老の公を奉すた老林の不穿  
を誦すらるる 随ひて学ふ人ハ只白老



上之卷終

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation of a letter or a diary entry. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

十七年十一月十四日



赤坂  
鍾堂

